

インターネット時代の読解教育における教師の役割

川村 よし子

東京国際大学・ウィーン大学(2000.10-2002.3)


<要旨>

インターネットが全世界的に普及した今、それに対応した新しい形の日本語教育が求められている。インターネット上には膨大な日本語情報が提供されている。それらを教材として活用することができれば日本語学習者は生の最新の情報を用いた学習が可能になる。1997年から開発をすすめ、1999年からインターネット上で公開している「リーディング・チュウ太」(<http://language.tiu.ac.jp>)は、こうした学習を可能にする読解学習支援システムである。筆者はウィーン大学の上級日本語学習者を対象にした「上級読解」の授業において、このシステムを用いた読解教育の実践を行ってきた。この授業の目的は、学習者がインターネットを利用して日本語の文章を読み、情報を活用していく能力を身につけることにある。本発表ではこの授業について報告するとともに、この新しい形の読解教育における教師の役割について考察する。

1. インターネット時代の読解教育

インターネットは語学教育にも新しい可能性を作り出した。インターネットの利用によって、学習言語で書かれた情報の入手が容易になった。メール・掲示板等で学習言語を利用したコミュニケーションを行うことも可能である。インターネットを語学教育に取り込む試みがいろいろな形で行われるようになってきた(Armstrong & Yetter-Vassot 1994:475-486; El-Hindi 1998; Frizler 1995; Guest 1995; Kern 1998:57-92; Kost 1999:309-319; Newfields 1997)。だが、多くの日本語学習者、特に非漢字系の学習者にとって、インターネット上の情報やメール・掲示板等に書かれた日本語の文章をそのまま読んで理解することは難しい。何らかの読解支援ツールの存在が不可欠である。

筆者らが1997年から開発を進めてきた「リーディング・チュウ太」はインターネットを活用した日本語読解学習支援システムである。このシステムは学習支援ツール・読解教材バンク・リンク集から成り立っている。学習支援ツールには辞書引きツール(川村・北村・保原 2000:7-12)とレベル判定ツール(川村 1999:132-137)が整備されている。辞書引きツールはインターネットのインタラクティブな機能を活用したもので、入力された日本語文章中の単語の辞書引きを自動的に行う。文章は直接入力することもできるが、インターネット上の情報や電子メール等、電子化されたものをコピー&ペーストで入力することが可能である。コンピュータがこれらの文章を自動的に単語に区切り、辞書引きを行い、単語の読みや意味を表示する。また、学習履歴も提示されるので学習した語彙の確認や復習が可能である。辞書引きツールとしては日日・日英・日独の3種類が用意されている。一方、レベル判定ツールは、文章中に含まれるすべての単語や漢字のレベル判定を行うツールである。読解教材バンク(川村・北村 2001:241-255)には日本語学習者用の教材がおさめられている。全ての教材は、あらかじめ辞書引きツールによって処理されているため、日日・日英・日独辞書の情報が表示されるようになっている。また、学習履歴管理機能も備わっている。

<p>日本語読解学習支援システム</p> <p>リーディング チュウ太</p>		<p>Reading Tutor</p> <p>64356th visitor since Oct. 3 1999. Last updated on Jan. 9 2002. English / Deutsch</p>
<p>チュウ太の世界へようこそ チュウ太が、みなさんの日本語学習をお手伝いします。 <u>チュウ太の使い方</u> <u>日本語の先生方へ</u></p>		
<p>ニュース</p> <p><u>日独辞書ツール、ドイツ語版HP</u>を追加しました。 New 2001/10/31</p> <p><u>辞書ツールを静岡大学にも置きました。チュウ太が使えないときにご利用ください。</u> New 2001/10/31</p>	<p><u>チュウ太について</u></p> <hr/> <p><u>工具箱</u> 辞書ツール、レベル判定ツールなどがそろっています</p> <p><u>読解教材バンク</u> やさしい教材・楽しい教材・いろいろな教材がたくさん</p> <p><u>リンク集</u> 日本語を学ぶ人のためのリンク集です</p>	

「リーディング・チュウ太」のトップページ

リンク集は日本語学習者に役立つホームページにリンクが張られている。これらすべてを有機的に統合した読解学習支援システムが「リーディング・チュウ太」であり、学習者が自らのレベルとニーズに合わせて教材とツールを自由に選んで学べる学習環境を提供している。このシステムはインターネット上で公開している (<http://language.tiu.ac.jp>) ので、世界のどこからでも利用可能である。1999年10月に公開以降、約2年間で、すでに7万件を超えるアクセスがある。

インターネット時代の読解教育では、単にインターネット上の様々な情報を教材として利用するばかりでなく、こうした学習支援ツールを有効に活用しながら、学習者の読解能力そのものを高めていくための工夫が不可欠である。(川村 2000: 347-365)

2. リーディング・チュウ太を用いた授業の実践

筆者は2000年10月から2001年6月にかけてウィーン大学の「上級読解」の授業において、このシステムを用いた読解教育の実践を行った。この授業は日本語学習歴2年以上の日本語上級学習者(これはあくまでもウィーン大学での基準である。話す・聴く能力はかなり高い学習者もいたが、読み書きの能力は漢字300から500が理解できる程度であった)を対象にしたもので、履修単位は与えられるが卒業単位としては認定されないという自由選択科目である。この授業の目的は、インターネットを利用して日本語の文章を自由に読み、情報を活用していく能力を身につけることにある。これによって自律学習も可能になる。

授業は週1コマ(90分)で、秋学期12回、春学期13回であった。授業の最初の数回は、学習者の日本語力をチェックするとともに、コンピュータを用いた学習のための導入教育にさいた。その後の授業では、各授業の終了時に次回の読解教材を指定し、学習者に「リーディング・チュウ太」を用いた予習を課した。これによってクラスでの一斉授業は読解そのものに重点を置き、学生は文章の構造や意味を読み解く作業に集中することができる。各授業の後半は、教材を元にした手紙文や意見文の作成、討論等を行った。これによって語学学習

が本来目指すべき目標、コミュニケーション能力の向上や異文化理解に焦点をあてた授業が可能になる。また学習語を実際に用いることで語彙の定着を促すことができる。教材としては読解教材バンクに収められている教材の他、インターネット上で提供されている文章を利用した。

秋学期の授業内容は次の通りである。

第1回～第2回 リーディング・チュウ太の導入教育

- ・教材バンクの利用方法を知る
- ・リンク集を利用して必要な情報を見つける
- ・辞書ツールを利用して情報を読む
- ・学習履歴を活用して自分の語彙リストを作成する

第3回～第4回 教材バンクの意見文を読む

- ・予習：教材バンクの「意見文」を読んでくる
(教材：<http://contest.thinkquest.gr.jp/tqj1999/20190/eng/shoudo/index.html>)
- ・意見文についての討論・手紙文作成

第5回～第10回 朝日新聞の「天声人語」を読む

- ・予習：辞書ツールを利用して「天声人語」を読んでくる
(教材：<http://www.asahi.com/paper/column.html>)
- ・単語の読み・意味に関する小テスト
- ・言葉の使い方・構文・慣用表現等に留意した読解
- ・教材の主題についての討論・意見文作成

冬休みの課題：毎日新聞の「社説」を読んで意見文を書く

(教材：<http://www.mainichi.co.jp/eye/shasetsu/index.html>)

第11回～第12回 各自の書いた意見文に関するディスカッション

各回の授業の流れは次の通りである。例えば、第5回から10回の授業では、次の週に扱う「天声人語」の記事を前の週に指示すると共に、着目すべき単語をリストの形にまとめたものを配布した。非漢字系の学習者の場合、一斉授業の形で漢字や単語に関する説明を加えて語彙の定着を図る必要がある。そのため学生達にはリストの単語に注意してチュウ太の辞書ツールを用いて予習してくることを宿題にした。

授業は単語の読みや意味の確認作業から始めた。小テストとしては、前回配ったリストと同一の物を配布し読みや意味を記入させる。その後答え合わせを兼ねながら、漢字(熟語)の読み方の規則、漢字の形態的特徴と覚え方について説明を加えていった。

読解は構文や指示語に重点を置いた。構文に関しては、特に名詞修飾節がとらえにくいいため、学期当初にはこれにかなり時間をさいた。また、現在の辞書ツールでは表示できない慣用表現や連語については、意味の確認を行うと共に、派生的な意味を推測する作業や学習者の母語との比較なども行った。

テキストの内容についての意見交換は読解後ばかりでなく、読解の途中にも適宜差し挟んでいった。特に異文化理解に関わるテーマの場合には、こうした意見交換によって内容の理解も深まる。読解終了後、時間の余裕があればさらに討論の時間を設けた。また、教材の内容が意見文に適している時は意見文作成を宿題にした。この場合は、翌週、互いの意見文をもとにした意見交換の時間を設けた。こうした意見文作成や討論等は、語彙の習得という視点からみても、言語学習そのものの目的から考えても、意味が大きい。また、学生達もこう

した意見交換や討論に極めて積極的に取り組んでいた。

秋学期の12回の授業が終わった時点で、授業に関するアンケート調査を実施した。

3. 学習者の評価

アンケート調査は無記名で、授業に参加した学習者7名全員に対して行った。この新しい学習方法を用いた読解の授業に対する学習者の評価(1から5までの5段階評価、5が最も良い)は極めて高く、全員が肯定的な評価をしていた(「おもしろかった」:全員が5、「役に立つ」:5が6名、4が1名)。また「リーディング・チュウ太」に関しては全員が「とても役に立つ」という評価だった。ただしどの程度利用したかについては「よく利用した」が4名、「時々利用した」が3名だった。これはウィーン大学の場合日本語が読めるコンピュータが3台しかなく、家に持っている学生も少ないという状況が影響している。

システムそのものについてどう思うか自由記述式で回答してもらったところ、次のようなコメントがあった。

a. 辞書ツールが使えるのでとにかく便利だ。

b. インターネットで提供されている日本の最新情報が読める。

c. インターネット上の情報を読むことが可能になった。レポート作成には不可欠な道具だ。学習者の中にはこのシステムを授業の予習に使うだけでなく自らの情報収集に利用し、さらに日本に関するレポート作成のために活用する学生も出てきた。

一方、この新しい形の読解授業全体については、次のようなコメントがあった。

a. 辞書を引く作業が軽減されているため予習がしやすい。

b. 自分のペースで学ぶことができる。

c. 日本・日本文化に関する情報の活用が可能になった。

d. 意見文作成や討論の時間も非常に重要である。

ところが、こうした肯定的な意見の一方で、漢字が難しくてなかなか覚えられない、言葉の使い方に関するもっと詳しい説明が欲しい、というコメントがあった。履修している学生達の漢字能力を考えると、辞書ツールの助けがあるとはいえ、彼らの漢字学習の負担を軽くする漢字教育をより系統的に行う必要があるといえよう。

4. 新しい形の読解教育における教師の役割

上記のような読解教育を実践した結果、教師の役割が従来とは異なってくることも明らかになった。新しい形の読解教育を実践する場合には、次の点に十分留意する必要がある。

a. 段階的な導入教育

パソコン、インターネットに関する導入教育(リテラシー教育)は、時間をかけて段階的に行う必要がある。

b. 調整役としての役割

メール等での手紙文・意見文の交換を授業に取り入れる場合には相手方と事前に十分な打ち合わせが必要になる。こうした調整役としての役割も重要である。

c. 適切な教材選択

自律学習をめざした読解教育としては、慣用表現、待遇表現等に留意した教材の選択をするとともに、読解ストラテジーに重点をおいた授業をすすめる必要がある。

d. 漢字学習のための基礎訓練

前節でも触れたように、学習者が非漢字系学習者である場合、特に漢字熟語の造語法に関

する知識を与えるとともに、熟語の読みや意味を推測するための十分な基礎訓練を加えることが望ましい。

次節ではこの非漢字系学習者に対する漢字学習のための基礎訓練について述べることにする。

5. 漢字学習のための基礎訓練

非漢字系の学習者の場合、漢字に関する十分な基礎訓練が必要である。これはもちろん一般の読解教育や漢字教育にもあてはまる。だが、特にインターネットを使った自律学習を促すためには、語彙学習・漢字学習の負担を軽くし、できるだけ効率よく覚えられるようにする漢字教育が不可欠である。そのため、「上級読解」の春学期からのクラスでは、授業の前半を漢字学習のための基礎訓練にあてることにした。基礎訓練の内容は次の通りである。

a. 漢字学習方法のチェック

各自の学習方法をアンケートの形で記入させる。その後互いの学習方法を紹介しあう中で、いろいろな学習方法があることを知る。

b. 漢字の構成要素

「仲間さがしクイズ」の形式で、漢字の読み・意味・機能・形などにそれぞれ着目する必要性を理解する。

c. 漢字の読み方

漢字の形と読みとの関係、音読み・訓読みの特徴、特に、ひとつの漢字に音読みあるいは訓読みが複数ある場合には意味が異なることを理解する。

d. 文中の漢字の読み方

文中に現れた漢字をどう読むか、漢字熟語はどう読むか、連濁はいつ起こるか等の基礎的な規則を知り、新出漢字の読みに対する類推力を高める。

e. 漢字の形態的特徴と覚え方

漢字の成り立ち（六書）に関する復習。基本的な偏と旁（つくり）の意味と機能を知ると共に、同一部首の漢字を集めそこから意味を類推する練習を行う。

f. 熟語の構成要素

同じ漢字を含む熟語を集め、各々の意味の違いを考える。同じ漢字でも熟語になったときには置かれる位置によって意味（機能）が異なる場合があること、またその規則を知る。

g. 類義語の意味の違い

類義語の意味の違いに着目し、各々の言葉の持つ意味範囲、文体レベルによる言葉の使い分けに留意すると共に、熟語の意味を類推する能力を高める。

h. 漢字熟語の機能

サ変動詞や形容動詞になる漢字熟語の特徴を抽出し、未知の漢字熟語に対してもこうした機能に配慮する必要性を知る。

各々の基礎訓練には毎回 30 分程度しかさくことができなかつたため、学習者に対して十分な訓練が行えたとはいえないが、学生達からは「漢字が覚えやすくなった」「熟語の意味の類推が以前よりもできるようになった」というコメントを得た。

今回の基礎訓練で扱った個々の項目は決して目新しいものではない。日本語教育機関においてすでに実践されているものも多く、川口・加納・酒井(1995)ではこの他にも示唆に富む教育方法を具体例と共に示している。非漢字系学習者を対象とした日本語教育では、こうした形での漢字教育が正規の日本語科目の中により積極的に組み込まれる必要があるだろう。ウィ

ーン大学の場合、これまでの漢字教育はどちらかというと個々の漢字に着目した教育が行われてきた。そのため、学生の多くが漢字や熟語をひとつずつばらばらに覚えてきたようである。インターネットの普及にともない、莫大な量の情報から必要な情報を短時間に取り捨選択する能力、より多くの情報を正確に読み解く能力が要求されてきている。非漢字系の学習者に対して漢字学習・語彙学習の負担をできるだけ軽くするための漢字教育が必要なことを痛感すると共に、自律学習を可能にする教材や教育法を多くの日本語教育機関に普及させていく必要性を感じた。

なお、ウィーン大学でこの「上級読解」の授業と同時期に行っていた「応用日本語」の授業報告は、<http://language.tiu.ac.jp/viennadiary/index.html> で公開している。あわせてご覧いただければ幸いである。

参考文献

- 川口義一・加納千恵子・酒井順子(1995)『日本語教師のための漢字指導アイデアブック』創拓社出版.
- 川村よし子(1999)「語彙チェッカーを用いた日本語教科書の分析」
『The Second International Conference on Computer Assisted System for Teaching & Learning Japanese CASTEL/J'99 Proceedings』132-137.
- 川村よし子・北村達也・保原麗(2000)「EDR 電子化辞書を活用した日本語教育用辞書ツールの開発」『日本教育工学雑誌』第24号(Suppl.) 7-12.
- 川村よし子(2000)「インターネット時代に対応した読解教育」
『新世紀之日語教学研究国際会議論文集』台湾:東呉大学, 347-365.
- 川村よし子・北村達也(2001)「インターネットを活用した読解教材バンクの構築」『世界の日本語教育(教育事情報告編)』第6号, 国際交流基金日本語国際センター, 241-255.
- Armstrong, K. M., & Yetter-Vassot, C. (1994). Transforming teaching through technology. *Foreign Language Annals*, 27, 475-486.
- El-Hindi, A.E. (1998). Beyond Classroom Boundaries: Constructivist Teaching with the Internet Children's Literature in the Classroom, *The Reading Teacher*. Available: <http://www.readingonline.org/electronic/RT/constructivist.html>.
- Frizler, K. (1995). The Internet as an educational tool in ESOL writing instruction. Available: <http://thecity.sfsu.edu/~funweb/allthesis.htm>.
- Guest, M. (1995). Interview with a cat: The computer MOO and ESL. *Learner to Learner*, 3(3). Available: <http://www.hunter.cuny.edu/ieli/pozzo.html>.
- Kern, G. R. (1998). Technology, social interaction, and FL literacy. In J. A. Muyskens (Ed.), *New ways of learning and teaching: Focus on technology and foreign language education* (pp. 57-92). Boston: Heinle & Heinle Publishers.
- Kost, C. R. (1999). Enhancing communicative language skills through effective use of the WWW in the foreign language classroom. *Foreign Language Annals*, 32, 309-319.
- Newfields, T. (1997). Classroom Perspectives on the Internet, *The Language Teacher Online*: <http://langue.hyper.chubu.ac.jp/jalt/pub/tlt/97/may/perspectives.html>